

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年6月25日現在

機関番号：72681

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2010年度～2012年度

課題番号：22720097

研究課題名（和文） ラフカディオ・ハーンの仏教観形成と〈近代仏教学〉

研究課題名（英文） Lafcadio Hearn's view on Buddhism: formation and its transition –Comparative study in association with “Modern Buddhology”.

研究代表者

佐々木 一憲 (SASAKI KAZUNORI)

公益財団法人中村元東方研究所・研究員

研究者番号：80508515

研究成果の概要（和文）：

本研究は、日本人の民間信仰的仏教に触れ、自身の仏教観を大きく転換させて独特の仏教観を持つに至った帰化西欧文化人ラフカディオ・ハーンの仏教観をとりあげ、その変遷を考察しながら、来日以前の彼の仏教観を形作った19世紀に始まる西欧圏における仏教再構築の運動：〈近代仏教学〉の研究成果と、その〈近代仏教学〉導入による変質を被る以前の日本の民衆仏教と、双方が提示する「仏教」の性格について、対比的に明らかにしている。

研究成果の概要（英文）：

Introducing Lafcadio Hearn's unique understanding on Buddhism and its transition, especially regarding its drastic change after his coming to Japan, this research comparatively shows the characteristics of two types of Buddhism, i.e. one of which is the Buddhism of “Modern Buddhology” : the Buddhism which is reconstructed from Indian sources by European people, the other is the Buddhism of traditional “Japanese popular Buddhism”.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,500,000	450,000	1,950,000

研究分野：インド仏教

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：ラフカディオ・ハーン、小泉八雲、〈近代仏教学〉、オリエンタル・ルネッサンス、オリエンタリズム、アジアティック・ソサエティ、インド仏教

1. 研究開始当初の背景

従来より、21世紀は「宗教の時代」であるといわれて来た。本研究の研究代表者・佐々木一憲の専門研究対象である仏教においても、チベット仏教界の指導者ダライ・ラマ法王が世界的な人気を博する、「宗教の時代」

という言葉がある程度現実味を持ったかのように感じられる。

一方、国内に目を向けると、現代日本では「仏教の衰退」ということが叫ばれて久しい。これは、仏教に関心を寄せる人が少なくなったというよりも、既存の仏教教団がその社会

的存在意義を薄めているという現状を言い当てているものだが、佐々木はそのような状況を出させた最大の契機は、明治期に進められた〈近代仏教学〉の導入、ということにあったのではないかと従来より考えていた。

〈近代仏教学〉とは、西欧の伝統的な文献学的手法により仏教を研究する研究法、またその成果を指す言葉で、西欧で19世紀に流行したオリент学の一環として発展した学問であるが、明治期に廃仏棄釈を経験して打撃を受けた日本仏教界は、欧化の風潮もあり、いち早くこの〈近代仏教学〉を導入して再起を図った。これが日本仏教を変質させ、結果的に民衆と仏教との乖離を招き、現代の「仏教の衰退」状況を招く遠因となったと考えられる。

そのような現状認識から研究代表者の佐々木は、現代における仏教の存在意義を考えるにあたっては、この〈近代仏教学〉そのものの特質を把握することと、それが日本仏教をどのように変質させたのかということとを考察しなければならないと考えていた。そうした折、格好の研究対象として目に留まったのがラフカディオ・ハーンであった。

ラフカディオ・ハーンは日本の伝統文化や精神性を西欧世界に紹介した人物としてあまりにも有名であるが、彼が仏教に造詣が深かったことは、我が国ではあまり知られていない。

彼は来日以前、米国滞在中のある時期から深く仏教に傾倒するようになり、集中的に仏教について研究している。ジャーナリストとして、仏教を扱った記事をかなりの数、新聞や雑誌に寄稿していて、米国の読者の間では仏教寄りの人間として認知されていたと推測される。

その彼の仏教観は来日し、〈近代仏教学〉による改質の影響がまだ及んでいなかった、旧来の日本の民衆仏教に触れることで大きく変化した。

そうしたことから、研究代表者の佐々木は、このラフカディオ・ハーンという人物の仏教観の変遷をたどることを通じて、

(1) 西欧人は仏教をどのようなものとしてとらえ、仏教のどのような点に魅力を感じたのか、ということ。

(2) 西欧人はどのような資料にもとづいて仏教を研究・再構築したのか、ということ。

また、明治期に導入されて以来、今日まで仏教研究の主流となっていることから、結果的に現代日本で行われている仏教に近い〈近代仏教学〉的な仏教観を持っていたハーンのもの、その仏教観を大きく変質させることになった、

(3) 当時の日本の民衆仏教の内容と実情、ということ。

この三点について、従来なかった新しい知

見を得ることができるのではないかと考えた。

以上が本研究を企画した背景である。

2. 研究の目的

(1) ラフカディオ・ハーンの仏教研究の足跡をたどり、その内容と変遷を明らかにすること。

(2) 〈近代仏教学〉について、その運動を主導した西欧人にとって、仏教がいかなる存在として映っていたのか、という側面を中心に、その進展の経過や他分野との学問的な関連性などにも目を配りながら、内容を整理する。

(3) 明治期の〈近代仏教学〉導入以前の日本の民衆仏教について、教理や歴史の方面からのアプローチとは異なる視点からみた内実——異邦人ハーンを目を通して記録された、当時民衆の間に生きていた仏教の把握。

以上の三方面からの考察により、〈近代仏教学〉との関わりという切り口から、現代の仏教について考える素材を提供したい。

3. 研究の方法

(1) ハーンの著作集から仏教関係の作品を抽出し、そのうち代表的な作品5点について訳注研究を試みる。訳注研究を通して、その用語法の特徴などから、ハーンの仏教観の基礎資料を推定し、またそれらを年代順に整理することによって、ハーンの仏教理解の変遷を段階を追って明示的に示す。

上記の仏教関連作品5点に関しては、電子的データベースを構築するとともに、出版事情が許せば、プロジェクトの成果報告として公刊する。

(2) 〈近代仏教学〉について、それが19世紀に時代を風靡したオリент学の一環であることに留意し、できる限り広い視野をもって、その内容、特徴、影響関係などを調査する(※このテーマは今回の研究プロジェクトにおいてのみならず、人類文化史上の重要なターニングポイントに関わる裾野の広い研究分野だと考えられるので、なるべく視野を広く保って、食欲に知見を広げ、深めることに留意する)。

西欧のオリент学において、インド学の占める位置は、印欧語族の発見というファクターを介して、特異かつとりわけ重要なものとなっていると考えられるので、その点について精査して、立証しながら、インド学の成り立ちについて、西欧人でもインド人でもなく日本人であるという利点を生かして、価値中立的な第三者的視点から調査・考察する。

その際、経験上、インド人的な視点の方は、

資料の不足や偏りから、どうしても不十分になりがちであるため、極力、インド学発祥の現場に赴き、資料と知見の収集、および紹介に努めることを心がける。

4. 研究成果

(1) 当初、研究成果報告として、ハーンの仏教関連著作5点をまとめた訳注研究書の自費出版による公刊を目指していたが、出版社から、より本プロジェクトの趣旨と研究成果を直接的に綴る書物(新書)を上梓する話を持ちかけられ、目下、企画進行中である。(※外部企業との交渉事であるため、本プロジェクトの研究期間内に話をまとめることができなかつた。)

(2) インド学発祥の研究所、インド・コルカタの **The Asiatic Society of Bengal** に二カ月程度所属し、内部者として、一般には非公開の書庫などに入って蔵書内容等を確認することができた。また、特殊な資料を閲覧する機会にも恵まれ、同研究所の歴史について、公開情報よりも深いレベルの知見を得ることができた。同時にシャンデルナゴルやセランポールといった近隣の関連施設も訪問調査し、これにより、インド学の発祥に関わった人物のうち、これまで日本ではあまり注目されることのなかった人物についての知見を得、また現地外では入手困難な資料を入手・将来することができた。

(3) インド・シムラーの **Indian Institute of Advanced Study** にて長期滞在研究を行い、インド学の展開について、日本国内で入手・閲覧が難しい資料を参照しながら研究を進めることができた。

以上、(2)、(3)を中心とするインドでの研究を通じて、西欧のインド学および〈近代仏教学〉に関して、次のような知見を得た。

- ① 西欧におけるインド学の流行については、印欧語族の発見に伴って生じた、西欧人のインド人に対する同族意識が働いていたこと(セム系のエジプトやメソポタミヤ、アジア系の中国よりも、インドの文明に高い評価を与える)。インドの文化・文明の中でも、イスラム教徒のムガル帝国が統治する同時代のインドではなく、ヴェーダ時代など、ことさらインド古代の文化・文明を評価する傾向がある。
- ② ヒンドゥー教ではなく、仏教の方に力点が置かれたのは、開祖ゴータマがキリストの存在に準えられて理解されたことによること。

(4) ラフカディオ・ハーンが集中して仏教を研究したニュー・オリンズ時代の彼の蔵書

を収める、米国・ルイジアナ州ニュー・オリンズの **Tulane University** 図書館に設置された **Japan room** を訪れ、同室所蔵の蔵書のリストを作成した。(※同室所蔵の蔵書リストに関しては以前、同室の学芸員がリストを作っていたが、入手困難であった)。

(5) ラフカディオ・ハーンの仏教観について、以下の知見を得た。

- ① ハーンは少なくとも最初のうちは、当時流行していた H.スペンサーの考え方に準える形で、仏教を理解しようとしていたこと。
- ② H.スペンサーの社会進化論という一種の進歩史観が輪廻転生の思想と重ねあわされて理解されていたこと。
- ③ ハーンにとっては、自我もしくは魂の有無についての立場が、個人主義の是非という問題とも絡めて、キリスト教よりも仏教を評価する基準となっていたこと。
- ④ 来日の前後を通じて、ハーンには自我(エゴ)が悪の元凶であるとの認識があった。来日以前は、仏教は自我の滅却を目的とするという意味で優れていると考えていたが、来日後は自我そのものに対する見方が変わり、多元的単一論(pluralistic monism)という立場をとるようになった。この見方を日本人の精神性に投影し、仏教国の住人である日本人にはそもそも西洋人が考えるところの「我」という概念がなく、そのことが日本人の穏やかで倫理的な精神性を醸成している、との見解を表明するにいたったこと。

以上をはじめとする諸研究を通じて、神道的な思想に親近感を持っていたとされることの多いハーンに仏教教理に関する深い理解があったこと、また作品にもその影響が見られることを示し、今後のハーン研究においては仏教という視点も考慮する必要があるということを示唆したこと。また、今日の仏教研究の主流が〈近代仏教学〉の流れを汲み、そのパラダイムの上でなされているということを示唆したこと。その〈近代仏教学〉の性格や特徴を、インドにおけるインド学、オリエント学という従来にない視点を交えて考察したこと等、関連分野に対して、研究上の新しい視界を開くことができたと考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

前田専學・佐々木一憲、ラフカディオ・ハーン(小泉八雲)著『涅槃』IV一邦訳と註記一、

東方、査読有、第 28 号、2013、pp327-342.

〔学会発表〕(計 6 件)

- ① 佐々木一憲、西洋の「仏教発見」とアジア仏教文化圏の出現、東方学院・酬仏恩講合同講演会(招待講演)、2012年12月1日、法相宗総本山薬師寺(奈良市)。
- ② 佐々木一憲、碧い眼で見出した仏教、東方学院・新春研究発表会、2012年2月27日、東京ガーデンパレス(文京区)。
- ③ 佐々木一憲、現代インドに生きる仏教—見える仏教と見えない仏教、東方学院・鶴岡文庫共催講座、2012年2月26日、鶴岡文庫(鎌倉市)。
- ④ Kazunori SASAKI, European Discovery of Indian Buddhism in 19c- Their quest for new identities, Weekly Seminar, 2011年8月4日, Indian Institute of Advances Study(Shimla, India).
- ⑤ Kazunori SASAKI, Small talk on the revival of the relationship between India and Japan, Guest Talk, 2011年2月17日, Tirthahalli Maha-vidyalaya(Tirthahalli, India).
- ⑥ Kazunori SASAKI, Tengyur translation into Japanese, International Conference on Tengyur Translation, 2011年1月8日, Central University of Tibetan Studies(Sarnath, India).

6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐々木 一憲 (SASAKI KAZUNORI)

公益財団法人中村元東方研究所・研究員

研究者番号：80508515